

ドンマイ!!

茜川オダマキーズ

(第二話)

主な登場人物

織田真紀―オダマキーズ捕手・キャプテン

海藤知慧―前同二塁手・副キャプテン

早田里菜―前同・一塁手

桐林沙月―前同・三塁手

龍野季穂―前同・遊撃手

城内美青―前同・監督

麓飛鳥―前同・中堅手

本村香苗―前同・左翼手

水上小夜―前同・右翼手

杉崎寿音―前同・投手

麓栄治―飛鳥の父【麓喜軒】店主

恵―飛鳥の母

初田信和―【麓喜軒】従業員

城内誠一―美青の父

真理子―美青の母

杉崎芳江―寿音の祖母

海藤凌雲―知慧の叔父

佐野和樹―茜川高校生徒・真紀の彼氏

園内裕美―スーパーマーケット・パート従業員

桐林優花―沙月の妹

海藤賢倫―知慧の兄

龍野研造―季穂の父

静海―季穂の母

真斗―季穂の弟

権藤凜子―朝霞学園女子野球部監督

岡坂恵里―朝霞学園女子野球部部員・投手

白石澄香―朝霞学園女子野球部部員・捕手

○路上

河川敷上の道を並んで帰っていく真紀、知慧、里菜、沙月、

季穂、寿音、美青の七人。

沙月「すごいボールだね、ナックルって」

季穂「どんなふうに向かってきた？ 真紀」

真紀「どんなふうについているか。見たでしょ。ゆらゆら揺れて、目の前でガクガクなって、みたいな感じで」

美青を見る五人、美青照れくさそうに笑っている。

真紀「あと、ボールが全然回転してなかった」

知慧「回転してなかった？」

真紀「うん。スーッと、そのまま飛んできた」

美青「それが、ナックルなの。空気抵抗を受けやすいから不規則にあんなふうに揺れて——」

美青、突然その場に座り込む。

知慧「美青！ 大丈夫！？」

驚く六人、美青の周りに腰を落とす。

しばらくそのままにいる美青。深呼吸を繰り返す。六人を見渡し笑って。

美青「ちょっと投げただけなのにね」

沙月「ごめん、わたしが言ったから」

首を横にふる美青。

美青「楽しかったし、嬉しかった——すぐめまいがくる。情けない体だよ、ほんとに」

薄く笑う美青をじっと見つめている六人。

真紀「——ねえ、チーム作らない？」

知慧「はあ？ 急にあなたなに言ってるのよ」

真紀「作ろうよ野球チーム、わたしたちで。いつまでもおじさんたち混ぜてもらってるだけじゃつまんないよ。そんでね、美青が監督するの。いいと思わない」

真紀を見つめる六人。

里菜「いいよ、それ。賛成」

季穂「うん、いいね」

知慧「でも、六人でどうやってチーム作るのよ。最低九人はいるんだよ」

真紀「集めりゃいいじゃん、あと三人」

知慧「あんた簡単に言うけどねえ」

美青「——わたしが、監督」

真紀「うん。美青が監督。いいじゃんね、みんな」

頷く五人。

寿音「真紀、それ、最高」

真紀「でしょお」

知慧「これだよ」

里菜「え、なにが」

知慧「いつもしょーもないことしか言わないくせに、たまにこういうのをぶち込む。この女は……」

美青「練習メニューとかもわたしが考えていいの？」

真紀「もちろん」

美青「じゃあ、まずは真紀がセカンドにちゃんとボール投げられるようになることから、徹底的に」

真紀「げっ……」

知慧「当たり前でしょうが。練習つきあっただけだからちゃんと投げられるようになるのよ！」

真紀「はい……」

笑う六人。

○カラオケボックス・店内

唄っている茜川高校の制服を着た麓飛鳥（16）。盛り上がって聞いている同級生の女子生徒三人。

○ファミリーレストラン・店内

四人掛けの窓際テーブル席を前に座っている飛鳥たち四人。

A 「てかき、飛鳥はもうバスケやんないの？」

飛鳥「——うん。もうやんない」

B 「でも、それってなんかもったいなくない？ 中学の時間東大会までいったんでしょ」

C 「だよね、背、高いのに」

飛鳥「もったいなくないの」

A 「なんでよ」

飛鳥「——才能ないからもったいなくなんかないの」

窓外に目をやる飛鳥。肩ひじついて行き交う車をボーッと見る。

飛鳥「ただデツカイだけの女ですよ、わたしなんて」

飛鳥、一人ごちる。

○中華屋【麓嬉軒】店前

歩いて帰ってくる飛鳥。店横の露地を通って、奥の家屋へ。

○前同・店内

街中華。カウンター席は満席。厨房で、中華鍋を振っている店主で飛鳥の父の栄治（40）。調理をしている従業員の初田信和（20）母の恵（38）も忙しく立ち働いている。

○麓家・居間

寝っ転がってテレビを見ている飛鳥。

○〈麓嬉軒〉店内

変わらず賑わっている店内。入店してくる城内家。美青と父の誠一（47）、母の真理子（46）。

栄治「はい、いらっしやい！ お待ちかねだよ！」
予約席の札が立っているテーブルに座る城内家。

栄治「(信和に) おい」

信和「はい」

栄治「飛鳥もう帰ってるな」

信和「はい、たぶん」

栄治「呼んできて手伝わせろ。縄つけてでも引っ張ってこい」

信和「……」

栄治「早く行け」

信和「——はい」

厨房をでる信和。

○麓家・居間

寝転がってテレビを見ている飛鳥。部屋のドアを開ける信和。

信和「飛鳥ちゃん、大将が店手伝えて言ってる」

飛鳥、反応しない。

信和「飛鳥ちゃん、俺、怒られちゃうから……」

飛鳥、反応しない。

信和「飛鳥ちゃあん……」

ダンッ！ 拳で床を叩く飛鳥。

○へ麓嬉軒〈店内

厨房で洗い物をしている飛鳥。出来上がったチャーハンと餃

子の皿を飛鳥の前に置く栄治

栄治「一番テーブルに持って行け」

無言で水道の栓を止める飛鳥。

×

×

×

飛鳥、城内家のテーブルに配膳する。

美青「麓さん」

美青を見る飛鳥。

飛鳥「城内さん、だよね」

頷く美青。

美青「バイト？」

首を横に振る飛鳥。

飛鳥「わたしん家、ここ」

美青「そうなんだ」

テーブルを離れる飛鳥。厨房で洗い物を始める飛鳥を見ている美青。

×

×

×

会計をしている城内家。対応している飛鳥。

飛鳥「ありがとうございました」

美青「すごくおいしかったです」

飛鳥「ありがとう。お父ちゃんに言っとく」

店を出る城内家。

暫くの後、入口ドアがまた開く。美青が顔を出す。驚く飛鳥。

美青「ねえ、麓さんって今部活は？」

飛鳥「え——なにもやってないけど」

美青「そっか。悠蓮会館って知ってる？ 葬儀場の」

飛鳥「知ってるけど」

美青「そのね、第三駐車場で野球の練習してるの、わたしたち。

日曜日は河川敷のグラウンドで試合もしてる」

飛鳥「野球」

美青「うん。よかったら一回見に来てよ」

微笑みドアを閉める美青。

×

×

×

閉店後、皿洗いを終え、厨房を出ようとする飛鳥。

餃子が一つ乗った皿を飛鳥の前に置く栄治。

飛鳥「？」

栄治「食え」

飛鳥「は？」

栄治「いいから食え」

飛鳥「なんで」

栄治「食えや」

栄治の圧に押され、渋々餃子を口に入れる飛鳥。

飛鳥「……」

栄治「どうだ」

飛鳥「味、しない」

栄治「よく噛め、少しだけする」

咀嚼し、食べる飛鳥。

飛鳥「しない」

栄治「おまえの同級生が食べてたやつだ。お母さんからレシピもら
ってその通りこしらえてる。心臓と腎臓が悪いんだそうだ」

栄治をじっと見る飛鳥。

栄治「いつまでも不貞腐れやがって——寝ろ」

厨房を出ていく飛鳥。

○麓家・飛鳥の部屋

布団に入っている飛鳥。

●飛鳥の回想①

○朝霞高校・体育館へTⅡ一年前・朝霞高校 女子バスケット
ボール部入部セレクションへ

セレクションに参加している中学生たちが、コートの中で試
合をしている。その中に飛鳥もいる。

※3ポイントシュートを放つ飛鳥。決まる。ガッツポーズ。

※ドリブルで切れこむ飛鳥。チームメイトがパスを求める。

飛鳥、チラッと見るが強引にシュートを放つ。阻まれ逆襲
される。

※ボールの奪取でヒートアップする飛鳥。レフェリーが笛を
吹く。ボールは相手チームへ。納得いかずレフェリーにく
ってかかる飛鳥。

※飛鳥の3ポイントシュートが外れる。

●飛鳥の回想②

○麓家・玄関

※帰宅する飛鳥。ポストを覗く。封筒が入っている。封を切る飛鳥。手紙を読む。セレクション不通過の知らせ。手紙を見つめ動かない飛鳥。(回想終わり)

○麓家・飛鳥の部屋

寝返りをうつ飛鳥。

○【悠蓮会館】入口

《本村家》の札が出ている。

○前同・葬儀会場

通夜が行われている。祭壇に飾られている老婦人の遺影。親族席に座っている、本村香苗(16)。

○前同・蓮の間

畳敷きの広間。本村家の通夜ぶるまいの席。香苗がうつむいて座っている。
寿司桶を持って入ってくる里菜。香苗に気づく。
立ち上がる香苗。部屋を出ていく。その姿を目で追う里菜。

○前同・ロビー

ソファに座っている香苗。そこにやってくる里菜。

里菜「本村さん」

里菜を見る香苗。

里菜「五組の早田です——この度はご愁傷様です」

深く頭を下げる里菜。

里菜「座ってもいいかな」

頷く香苗。香苗と向かい合って座る里菜。

沈黙。里菜、香苗の言葉を待つように。

やがて香苗。

香苗「大好きだった。すごくかわいがってくれた。『友達作らなきゃだめだよ』っていつも言ってくれた。でも、わたしはおばあちゃんがいたらそれでよかった——」

沈黙。

香苗「本当におばあちゃんがいたらそれでよかったんだ」

涙をこぼす香苗。

里菜「——真紀と同じクラスだよ、本村さん」

香苗「え」

顔を上げる香苗。

里菜「織田真紀。わたしといっしょにソフト部クビになった」

香苗「織田さんは、隣の席」

里菜「うん、真紀から聞いている。あの子がね、『本村さん、おばあさん亡くして落ち込んでるから、お葬式のとくに会えたら話しか聞いてあげって』って」

香苗「わたし、織田さんになにも言っていないよ」

里菜「先生に訊いたんだって。お葬式がうちの会館だったことも」

香苗「先生に……」

里菜「うん。ほんとおせっかいだよ。わたし言ったんだよ。『大事なひとと亡くしたひとつって、あんまり喋りたくないもんだよ』って。したらあの子じーつと考えてさ。『それでもなにか話したいことがあったら聞いてあげて』だってさ」

香苗「織田さんが、そんなこと」

里菜「そういう子なんだよ、あの子は。ねえ、本村さん。わたしたちね、この前からうちの第三駐車場で野球の練習やってるの」

香苗「野球」

里菜「うん。半分遊びみたいなもの。一回見にこない？」

香苗「え」

里菜「いっしょにキャッチボールやろうよ」

香苗「——いいよわたしは。運動とか得意じゃないし」

里菜「そんなの関係ない——わたし、本村さんと友達になりたい。

おせっかい女のおかげだね」

里菜を見つめる香苗。微笑み頷く里菜。

○【アドラーブル】店内

奥の席、向い合せに座っている水上小夜（16）と中年の男。

小夜、人目を引く美少女である。和やかに話す二人を、離れ

たところから見ている沙月と季穂。顔を寄せ合うようにして。

季穂「一組の水上さんじゃんね、やっぱ」

沙月「うん、まちがいない」

季穂「あれってさ、やっぱさ」

沙月「うん、だよね——」

立ち上がる小夜と男。レジ前に立つ沙月。二人と向かい合う。

頷く小夜。ウェイトレス姿の沙月を見て。

小夜「アルバイト？ 桐林さん」

沙月「え、ううん。ここわたしん家。手伝ってる」

小夜「そっか。素敵なお店だね——援交とかじゃないよ」

沙月「え？」

小夜、微笑んで。

小夜「苗字がうけど、本当のお父さん。月に一回会ってるの」

沙月「あ、いや、わたしたちそんなつもりじゃ……」

小夜「うそばかり。こっち見てこそコソコソ話してたくせにい〜」

ケラケラと笑う小夜。

小夜「そんな風に見られるの、慣れてるから」

父と腕を組み店を出ていく小夜。

呆然と取り残される沙月と季穂。

○前同・店先

立っている沙月と季穂。

沙月「あゝ、今日はやっちゃまったなあ」

季穂「だね」

沙月「明日学校行ったら水上さんに謝んなきゃなあ」

季穂「そこまでするのも逆におかしくない。あの子全然気にしてなかつたみたいだし」

沙月「それもそうだけどさあ……」

季穂「でもマジで綺麗だよねあの子」

沙月「うん。今まで芸能事務所にスカウトされたこと、何回かあるって聞いた」

季穂「あゝ、分かるわそれ——んじゃ帰るわ。あれ？」

小夜がひとりでトボトボと歩いてくる。その前を通り過ぎようとすると二人に気づかない小夜。

沙月「水上さん」

立ち止まる小夜。二人を見る。涙に濡れているその目に驚く二人。

しゃくり上げ始める小夜。

小夜、その場に座り込む。子どものように泣く。

顔を見合わせる沙月と季穂。二人、泣き続けている小夜の横に腰を降ろす。沙月、小夜の肩を抱いて。

沙月「中、入ろ」

小夜を立たせる二人。店の中に入る三人。

○前同・店内

カウンター席に座っている三人。小夜、鼻をすすりあげている。

小夜「ありがとう」

沙月「ううん、なんにも」

季穂「言わなかったって、べつにいいからさ」

小夜「——再婚するって、お父さん。今日初めて聞いた。福岡行くって——そんなのって、ないよ」

沙月「もう、会えないの？」

小夜「今までどおりだって、言ってるけど、今までどおりになんて

ならないよ、きつと。今までどおりなんかじゃ、ぜんぜんない…
…」

俯き、涙をこぼす小夜。

沙月「——水上さん、今日うち泊まんなよ」

小夜「え」

季穂「わたしも泊まる。家に電話するわ」

沙月「(厨房の譲吉と祥子に) いいよね」

譲吉「夜更かしのお夜食はサンドイッチでよござんすかね」

祥子「水上さんも、お家に電話してね。お母さん出たら代わるから」

小夜「——はい」

沙月「ねえ、カラオケ行こっか、今から」

季穂「おー、いいねえ。行こ、行こ」

沙月「(小夜を見て) そんな気分じゃない?」

小夜「——本当は、ご飯食べた後、お父さんとカラオケ行くはずだ

ったんだ」

沙月「じゃあ、行く?」

頷く小夜。

季穂「どんなの唄うの?」

小夜「わたし? ミスチルとか、浜崎あゆみとか」

沙月「わたしもミスチル大好き。この女は相川七瀬ばっか唄って正

直ウザイ」

季穂「ウザイって言うな!」

小夜「わたし、その人聴いたことない」

季穂「じゃあ聴かせてあげるっ! 行こっ!」

立ち上がる季穂。

沙月「だめだよ、燃料投下しちゃ」

季穂「うるさいよっ!」

笑う小夜。

○河川敷のグラウンド

朝霞高校女子野球部と草野球チーム、トップガンズが対戦している。その様を並んで見ている体操着姿の真紀たち十人。
(飛鳥、香苗、小夜もいる)とフレッシュボイスのメンバー。
研造、隣に立つ季穂に。

研造「昨日の夜、朝霞の監督からトップガンズの松本さんに練習試合組んでくれて電話があったそうだ」

季穂「うん」

戦況を見つめる監督の凜子。

マウンドに立つのは岡坂恵里(16)、受けるキャッチャーは同級生の白石澄香。

恵理、ダイナミックなフォームから速球を投げこむ。どよめきがおきる。

× × × ×
次々とトップガンズのバッターを三振に打ち取る恵理。

× × × ×
バッターボックスの澄香。バット一閃。打球は高々と打ち上がり、ホームラン。

× × × ×
グラウンドを縦横無尽に駆け回る朝霞学園女子野球部のメンバーたち。

× × × ×
矢のような送球で盗塁を試みた一塁ランナーを刺す澄香。

× × × ×
スコアボードにチョークで書かれる(3・18)。

× × × ×
真紀たちのところへやってくる凜子。

凜子「どう？ すこしは上達した？」

顔を見合わせる真紀たち。

凜子「何回か見せてもらったの、あなたたちがおじさんたちといっしょに野球やってるの。全員茜川の一年生だって？」

真紀「そうです、けど」

凜子「うちのバッテリーといっしょかあ」

真紀「あの二人、一年生……」

凜子「そうよ。二人とも男子に混ざってボーイズリーグにいたの。

野球がやりたくてうちに入ったのよ——あなた、セカンドまで投げられるようになった？」

うつむく真紀。鼻で笑う凜子。

凜子「練習はどうしてるの？」

美青「——わたしがメニュー考えて、自分たちでやっています」

凜子「自分たちで、あなたがメニュー考えて、か。ま、ケガしないようにね」

寿音を見る凜子。

凜子「いいボール投げるわね、あなた。なんでうちに来なかったの？」

寿音「それは……」

凜子「練習だけでも参加してみる？ ベつにかまわないわよ、わたしは」

俯き、首を横にふる寿音。

凜子「ふーん。ま、いいけど。しかし、おじさんチーム相手じゃ練習にもならなかったなあ」

美青「ピッチャーは回が進むにつれてイクバックの腕が下がる。

キャッチャーはリード面に大きな課題がある。内野の連携プレーも褒められたもんじゃない。三失点はそれが原因」

凜子「——言ってくれるわね、あなた」

美青「もっと言うとそれを改善する能力のない指導者が原因」

凜子「口のきき方に気をつけなさい！」

美青「先生だろうが大人だろうが、相手によるわ。人を小馬鹿にして悦に入ってる人間にはタメ口で十分よ」

にらみ合う美青と凜子。

凜子「ま、そうやってあなたたちはおじさんたち相手にキャツキャやってなさい」

立ち去ろうとする凜子。美青、その背に向かって。

美青「いつか試合を申し込む！」

立ち止まる凜子。

美青「このチームであなたのチームを絶対倒す！」

凜子、吹きだす。高笑いをする。

振り向いて不敵に笑う。

凜子「盗塁なしの特別ルールは勘弁してよ」

凜子、去る。

美青、向き直り九人を見る。九人、美青を見つめる。

美青「本村さん、麓さん、水上さん。今日は来てくれてありがとう。

チームに入ってほしい。三人が入ればチームができる。わたし、

あの人に勝ちたい。みんなといっしょに」

沙月「すごかったね美青、今の」

美青「え」

季穂「うん。タイマン張って負けてなかった」

美青「だって——あんな人に、負けるの絶対いやだ」

真紀「よおっし、いっちょやったるかあ！」

知慧「——ねえ、気づいてる？ あんたがいちばんバカにされたん

だよ、あの監督に」

真紀「……うん」

知慧「やったるか』は二塁にちゃんと投げられるようになってから

にしないよ」

真紀「はい……」

香苗「でも、わたし、経験ないよ。運動神経悪いし」

小夜「わたしもそうだよ」

美青「そんなの関係ない。やったことないから、やるの」

飛鳥「やったことないから、やる……」

美青「うん。わたし生まれて初めてキャッチボール誘われたときに

断ったの。そのときに言われたんだ」

知慧「ヘナツクルボールの君、に？」

美青「うん。『やったことないからやるんだよ。下手くそだから上手くなるんだよ』って」

飛鳥「——やるわ、わたし。あの監督、わたしも気にいらぬい」

香苗「ほんとに、下手でよかつたら」

小夜「うん、わたしも」

真紀「よおっしゃあ！ チーム結成！ OK牧場！」

思い切り真紀の頭をはたく知慧。

真紀「なにすんのよ！」

知慧「なんだ『OK牧場って』！ バカか！」

真紀「いいじゃんか！ 和樹くんがガッツ石松にはまってるって気に入ってずっと言ってるんだから！ うつつちゃったの！」

知慧「のろけんな、バカ！ てかあんたの彼氏は何にはまってるんだ

よ！ 早くホームベースの後ろに座れ！ 今日あんたの特訓だ！」

真紀「げろげろ……」

知慧「何言ってるんだあ！」

二人のやりとりに笑い声をあげる八人。

○杉崎家・居間

向かい合って食事をしている寿音と芳江（65）。

寿音「おばあちゃん」

芳江「なに」

寿音「今日、チーム作った」

芳江「野球の？」

寿音「そうだよ。他になんのチーム作るのよ」

芳江「女の子ばかりで」

寿音「うん」

芳江「物好きな子がそんなにいるんだねえ」

寿音「物好きとかって言わないでよ」

芳江「物好きだよ」

寿音「わたし、あの子たちをバックに投げるの、すごい楽しみだ」

芳江「似なくていいところばかり似て」

寿音「——ねえ、おぼあちゃん」

芳江「なに」

寿音「わたし、茜高行ってよかった」

芳江「そう」

食事を続ける二人。

○【アドラブル】店内

カウンター席に並んで座っている沙月と優花。優花、宿題をしている。

沙月「お姉ちゃんねえ、野球のチームに入った」

沙月を見る優花。

優花「おじさんたちの？」

沙月「ちがう。季穂たちと女の子だけのチーム作ったんだよ」

優花「へえ。先生とかはいるの？」

沙月「いや、いない。部活じゃないからさ」

優花「そっか。じゃあ髪の毛の事いろいろ言われたりしないんだね」

沙月「うん。そうだよ」

優花「よかったね」

沙月「うん、よかったよ」

優花の肩を抱き寄せる沙月。

○龍野家・ダイニングキッチン

食卓を囲んでいる一家。テレビはスワローズ戦のナイター中継。シヨートの宮本慎也がバックハンドでヒット性のあたりを捌き、ダブルプレーを成立させる。

研造・真斗「よっしゃっ！」

ハイタッチをする父と子。

季穂「ねえ」

研造「ん？」

季穂「今アウトにしたのなんて人」

研造「ん？ 宮本慎也だ。プロ野球ナンバーワンのシュートだ」

季穂「プロ野球ナンバーワン」

研造「ああ。走攻守、どれをとっても超一流。やるからにはこれく

らいめざにやなあ、季穂ちゃんも」

季穂「……季穂ちゃん言うな」

真斗「季っ穂ちゃああん」

真斗の頭をはたく季穂。

静海「こら、季穂！」

テレビ画面、鋭い打球がショートに飛ぶ。横っ飛びでライナ

ーを捕る宮本。

季穂・研造・真斗「よっしゃっ！」

季穂を見る三人。季穂、俯きご飯をかきこむ。

静海「完全復活かな？」

季穂「べつに、そんなんじゃないよ……」

季穂を微笑んで見る三人。

○【麓嬉軒】店内

営業中の店内。厨房にいる栄治と信和。

入ってくる飛鳥。

栄治「店から入ってくるな。何回言やあわかるんだ」

飛鳥、無視して。

飛鳥「信ちゃん、高校時代野球部って言ってたよね」

信和「俺？ うん。超弱いチームの補欠だったけど」

飛鳥「グローブとか持っているの？」

信和「あるよ。捨ててない」

飛鳥「貸してよ」

信和「え？」

飛鳥「野球やるからそのグローブ貸してよ」

信和「野球やるって……」

飛鳥「だめなの、どうなの」

信和「いや、貸すよ。てか、もう要らないからあげるけど」

飛鳥「じゃ、明日持ってきてよね」

店を出る飛鳥。栄治を見る信和。

栄治「だってよ。頼むわ」

信和「はあ。でも飛鳥ちゃん野球って」

栄治「やりたくなっただら」

中華鍋を振り続ける栄治。首をひねる信和。

○本村家・仏間

仏壇前の卓の上に、骨壺の入った桐箱が袱紗に包まれて置いてある。その隣に白木の位牌。

卓の前に座っている香苗。

香苗「なんかね、急に友だちできちゃったみたいなんだ、わたし。

まだ話してない子もいるんだけどさ——でも、ほんとにできる

かな、野球なんて。みんなの足引つ張ったり、しないかな」

香苗、袱紗を広げる。桐箱の蓋を開け、骨壺の蓋も取る。

手を入れ、祖母の骨片を一つ取り出す。

香苗「ずっといっしょにいてね」

骨片を強く握りしめる香苗。

○水上家・小夜の部屋

ベッドに腰掛け携帯電話で父と話をしている小夜。

小夜「うん。ごめんね、急に帰っちゃって。やっぱりびっくりしち

ゃったからさ。うん、うん、分かってるよ。なに謝ってるの——

福岡行く前に、もう一回会おうね。そのときはカラオケに行こう

よ。相川七瀬、聞かせてあげる——うん、うん。ねえ、お父さん、

わたしね、野球のチームに入ったの。うん。野球。あはは、びっ

くりした？ あのね——」

電話を続ける小夜。

○早田家・里菜の姉、真耶の部屋の前

廊下に座り壁に背をもたせかけ、部屋の扉に向かって話をしている里菜。

里菜「美青がね、すごかったよ。あの子本当に怒ってた。そりゃ怒るよね。わたしだってすごく腹たつたもん。なんなのあの監督——」

立ち上がる里菜。ドアに向かって。

里菜「勝つからね、お姉ちゃんいじめた朝霞に」

部屋からの反応はない。立ち去る里菜。

○峰陽寺・門

○前同・寺内・本尊前

般若心経を誦経している知慧と叔父の海藤凌雲（51）。

× × ×

向かい合って座っている知慧と凌雲。

凌雲「で、その子はどこが悪いんだ」

知慧「心臓と腎臓。その影響で他の臓器もよくないって」

凌雲「不憫だなあ」

知慧「うん」

凌雲「朝の勤めるとき、その子を思って経を詠んでやれ」

知慧「そうしてる」

凌雲「そうか——おまえが跡取りだったらよかつたんだけどな。相

棒の調子はどうだ」

知慧「はあ、おじさんも相棒とか言う！？」

凌雲「だって相棒だろ。二墨にちゃんと投げられるようになったか」

知慧「だからそんなのじゃないって、ただの腐れ縁だったの！」

凌雲、笑って。

凌雲「おまえは真紀ちゃんの話しするときは、本当にいい顔するなあ。幼稚園のときからそうだよ」

納得いかない顔の知恵を見て笑う凌雲。

○城内家・美青の部屋

机の前に座り、野球の教則本に赤ペン入れながら読みつつ、ノートをとっている美青。部屋の扉がノックされ、真理子が顔を出す。

真理子「まだ起きてるの」

美青「うん、もうちょっと」

真理子「体にさわるよ」

美青「ほんとに、もうちょっとだけ——ねえ、お母さん」

真理子「なに」

美青「今度はわたしがみんなをサポートする番なの」

真理子「——そう。あんまり無理しちゃだめよ」

美青「分かってる。もう少ししたら寝るから」

真理子「うん。おやすみ」

美青「おやすみ」

戸を閉める真理子。読書に戻る美青。

○帰り道

並んで帰っている真紀と佐野和樹（16）。

真紀、よちよちとしか歩を進めない。

和樹「マジで大丈夫？」

真紀「大丈夫——じゃ、ないかもしれない。内腿半端ない」

●インサート（回想）真紀の特訓風景。ミットを構え座っている真紀。その三メートルほど前から、下投げでボールを放る知恵。

美青「いちー！」

捕球する真紀。

美青「に！」

送球の体制を取る真紀。

×

×

×

一塁に立っている季穂。リードを取る。マウンドの寿音が投げる。二塁に走る季穂。真紀、体を突っ込み気味で捕球し、二塁の知慧へ送球。大暴投。

×

×

×

ミットを構え座っている真紀。その三メートルほど前から、アンダースローでボールを投げる知慧。

美青「いち！」

捕球する真紀。

美青「に！」

送球の体制を取る半泣きの真紀。その様がくりかえされる。

(回想終わり)

真紀「頭では分かってるんだけどさあ、ランナー走ると焦っちゃうんだよね」

和樹「夢中だね」

真紀「え」

和樹「野球に」

真紀「そんなのじゃ——そうかもしれないけど——だって、やっぱりちゃんと二塁に投げられるようになりたいし。美青が、すごく一生懸命に教えてくれるし——なんか、ごめん」

和樹「なに謝ってるんの。俺は好きだよ、野球に夢中になってる真紀」

和樹、手を差し出す。

真紀「——うん、ありがとう」

その手を握る真紀。真紀の手を引くようにして歩く和樹。

真紀「あたたた。もうちょっとゆっくり歩いてよ」

和樹「介護かよ」

真紀「うるさい」

二人、嬉しそうに帰っていく。

○へすみれ荘の外景
オンボロアパートである。

○前同・203号室

殺風景な部屋。午前六時の目覚まし時計が鳴る。
布団からむっくり起き上がる女、園内裕美(29)。
時計を止める。

裕美、部屋の壁に額に入れて飾られている、自分と少年
とが頬寄せ合って笑っている写真を見る。

× × ×
炊事場で歯を磨く裕美。

○前同・駐輪場

自転車にまたがる裕美。こぎ出す。

○河川敷の道

自転車をこぐ裕美。

○河川敷のグラウンドの前

草野球の試合中。真紀たちがまざって試合をしている。
自転車を止め、その様子をしばらくじっと見ている裕美。
また自転車をこぎ始める。

○【悠蓮会館】・第三駐車場前の路上
過ぎていく裕美。

○スーパーマーケット・駐輪場
自転車を停める裕美

○前同・従業員入口
入って行く裕美。

○前同・女子ロッカールーム
白衣・白帽に着替える裕美。

○前同・バックヤード廊下
歩いて行く裕美。

○前同・総菜部作業場
スイングドアを開けて中に入る裕美。
裕美「おはようございます」

フライヤーの前で揚げ物をしている社員の亀田（44）。
亀田「おはようございます！ 園内さん、最初寿司やって。で、目
途がいたら俺と交替ね！」
裕美「はい」

作業場奥の寿司部屋に入る裕美。
× × ×
巻きずしを作る裕美。
× × ×
フライヤーの前で揚物をする裕美。

○前同・店内
台車に商品に乗せ、品出しをする裕美。

○前同・駐輪場
仕事を終え、自転車にまたがる裕美。こぎ出す。

○【悠蓮会館】・第三駐車場前の路上

駐車場で真紀たち十人が練習をしている。その様子を自転車を停めて見る裕美。

素振りをしている香苗が裕美に気づく。二人、しばらく見つめあう。自転車をこぎだす裕美。去っていく。

○前同・駐車場内

真紀が送球練習をしている。寿音がマウンドから投げるボールを受ける真紀。山なりだがセカンドまでボールが届く。その様子がくりかえされる。

美青「真紀、いい感じ！ その感覚忘れないで」

真紀「うん！」

美青を見てミット越しに笑う真紀。そこへ寿音のボールが腹部に直撃する。

真紀「ぐあっ！」

うずくまる真紀。

寿音「真紀、大丈夫！」

マウンドから駆け下りる寿音。

知慧「バカが……」

送球を待っていた知慧がため息をつく。

× × ×

飛鳥、香苗、小夜がボールを高く投げ上げて、フライを捕る練習をしている。落球を繰り返す飛鳥と小夜だが、香苗は上手に捕球を続ける。

飛鳥「上手いじゃん、本村さん」

小夜「うん。すごいすごい」

照れくさそうに笑う香苗。

× × ×

内野ノックの練習。ノッカーは寿音。

打球がサードの沙月やショートの手穂、セカンドの知慧へ飛ぶ。打球は正面ばかり。

寿音「行くよ、沙月！」

沙月「こい！」

打球はセカンドの知恵へ飛ぶ。

寿音「ごめんごめん！」

沙月「ドンマイ、ドンマイ！」

その様子をベンチに座って見ていた美青。

美青「ノッカーがほしいなあ。全然変わってくるんだけどなあ……」

ひとりごちる。

外野では三人がフライボールキャッチの練習を続けている。

○河川敷のグラウンド

スコアボードにへ茜川女子野球クラブ（仮）とへフレッシェ

ボイスの文字。対戦している両チーム。0対0の七回表。

ランナーを一人背負って寿音。バッターボックスに研造。

季穂「寿音、バッター安パイだよ！ 思いきっていこう！」

研造「黙れ小娘！」

季穂「三振したら今晚は休肝日だよ！」

研造「のぞむところよ！」

研造、三振する。

研造「ぐああっ！ 休肝日いやあ！」

笑いが起きる。

次のバッターの初球、一塁ランナーが走る。

真紀「いち、にっ！」

送球する真紀。ベースに入った知恵がその球をしっかりと受け

とり、滑り込んできたランナーの足にタッチ。

塁審「アウト！」

知恵「っしゅ！」

真紀が飛び跳ねて喜んでいる。

最後のバッターの打球はレフトへのフライ。

飛鳥「わっ、きたきたきたきた！ 香苗っ！」

慌てる飛鳥。センターから猛然と香苗が走ってきて、飛鳥の
前が出る。難なくフライを掴む香苗。

飛鳥「助かった。サンキュ」

香苗、振り返ってにっこり笑う。

× × ×

七回裏、飛鳥の打席。ピッチャーは讓吉。

沙月「飛鳥！ピッチャーへなちよこだよ！サヨナラホームラン
打っちゃいな！」

讓吉「黙れ小娘！」

沙月「打たれたら讓ちゃんも休刊日！」

讓吉「のぞむところよ！」

讓吉の投げたボールを打つ飛鳥。打球は高々と打ち上がり、
ホームラン。

飛鳥、拳を突き上げる。沸き上がる真紀たち。

沙月「はい休肝日二号決定〜」

讓吉「いやああっ！」

マウンドにくず折れる讓吉。

× × ×

後かたづけをしている真紀たち。その様子を道の上から見て
いる自転車に跨った裕美。裕美に気づく香苗。

香苗「ねえ、みんな」

真紀「ん？」

香苗「あの人」

裕美を見る美青。誰もが。

知慧「どうしたの」

香苗「前に練習している時にもいたの」

真紀「いたって、練習みてたの？」

香苗「うん。しばらくじーっと」

去っていく裕美。

真紀「なんなんだろ」

十人、遠ざかっていく裕美の姿を見ている。

○河川敷の道

初勝利の喜びに沸きながら帰っていく十人。

前から朝霞高校女子野球部のメンバーたちが走ってくる。

よける真紀たち。過ぎていく野球部の面々。

少し遅れてやってくる自転車の凜子。真紀たちの前で止まる。

凜子「あら、おはよう」

無言の真紀たち。

凜子「挨拶もなしか。嫌われたもんねえ」

美青「嫌いですから」

凜子「親の顔が見てみたいもんだわ」

美青「いつでも見せてあげますよ。あなたの親よりましな親で残念でしょうけど」

チツと舌打ちをする凜子。

凜子「ああいえばこういう……試合してたのあなたたち」

真紀「そうですけど」

凜子「おじさんチームと？」

真紀「そうですけど、それが」

凜子「勝ったの？」

真紀「勝ちました」

凜子「へえ、初勝利ってやつか。特別ルールでね」

真紀「普通の盗塁ありのルールです！ちゃんとランナー刺しましたー！」

凜子「へえ、上達したじゃない。じゃあさ、うちと勝負してみる」

真紀「えっ」

凜子「さすがにまだ早いかあ。いや、女子の対戦チーム探すの苦労しててさあ。いい経験になると思うんだよね、あなたたちでも」

真紀「あなたたちでもって……」

凜子「それに、あなたの球だけは一級品よ」

寿音を見る凜子。

真紀「あなたレベルのボールを投げられるピッチャーは女子野球にはちょっといない。うちでも正直苦戦すると思う。どう、うちとやるの興味ない？」

寿音「——あります」

凜子「だって。どう、監督さん」

美青を見て不敵に笑う凜子。

美青「——受けるわ」

凜子「決定ね。じゃあ一週間後。グラウンド借りられるように手続きお願いね」

自転車で去りかける凜子。振り向いて。

凜子「キャッチャーのあなた。あのボール受けられるのはたいしたものよ。キャッチングだけは褒めてあげるわ」

去っていく凜子。にやける真紀を睨む知慧。

知慧「喜ぶな、バカ」

真紀「だってやっぱ嬉しいじゃん。天下の朝霞の監督に褒められたんだからさ——美青？」

うつむいている美青。

美青「のせられた——」

真紀「え」

美青「あの監督は寿音と自分のチームをやらせたいだけ。チームとしてなんかわたしたちをみていない」

寿音「いいよ、それでも」

美青「寿音」

寿音「ノーヒットノーラン、やってやるから。一点あれば勝てる」

飛鳥「よし。わたしがホームラン打つよ。なんかさ、遠くに飛ばすコツ分かっちゃったんだ」

真紀「遠くに飛ばすコツ？」

飛鳥「うん。うまく言えないんだけどさ、キャッチボールでボール捕るのと同じ感覚でバットを出すんだよ。そしたら遠くに飛ばす」

飛鳥をじっと見る美青。

飛鳥「ん？」

美青「すごい。桑田真澄と同じこと言ってる」

飛鳥「え、誰それ」

美青「一発で、一人のランナーも出さずに勝つか——」

真紀「勝てるよ、美青。絶対朝霞に勝てる。あの監督、思い切り悔

しがらせてやろうよ」

知慧「ちよつと褒められてニヤニヤしてたくせして」

真紀「いいじゃんかあ」

うなづく美青。

美青「勝ちたい、絶対」

真紀「うん、勝てるよ！ よっしゃ、うちらもランニングで帰るよ！」

ひとり走り出す真紀。啞然とその様をみている九人。

真紀、振り返って。

真紀「ほら、何やってんの！ 美青以外は走って走って！」

顔を見合わせる九人。走り出す。

美青「真紀！」

振り向く真紀。

真紀「なに！？」

美青「あなたキャプテンね！ で、知慧が副キャプテン！ 監督命

令だよ！」

真紀「ええっ！ ちょっとなにそれ！？」

知慧「ほら、言い出しっぺ！ 走るんでしようが！」

寿音「走るよ、キャプテン真紀！」

真紀「だからそんなの急に言われたってえ〜」

走っていく九人の後ろ姿を微笑んで見ている美青。

(第二話・了)